

氏名                      大 谷                      満

学 位 の 種 類              医 学 博 士

学 位 授 与 番 号              乙 第 8 7 号

学 位 授 与 の 日 付              昭和39年 9 月30日

学 位 授 与 の 要 件              博士の学位論文提出者  
(学位規則第5条第2項該当)

学 位 論 文 題 目              腸管癒着症に関する究研

論 文 審 査 委 員              教授 砂田 輝武      教授 田中 早苗      教授 児玉 俊夫

### 学 位 論 文 内 容 要 旨

#### 第1編 腸管癒着症に関する文献的考察

腹腔内手術に伴う術后腸管癒着の問題は、われわれにとって極めて重大な問題である。古くからその発生機序、防止法等について、多数の研究業績が発表されてきた。著者はこれらを 1)癒着発生条件、2)癒着発生機序 3)癒着防止法、に分けて文献的考察を試み、いささかの私見をのべた。

#### 第2編 腸管癒着発生機序に関する実験的研究

第3編で行う癒着防止法に先立って、腸管癒着の発生機序を解明せんとして種々の条件による損傷をラッテ盲腸部を中心とした部に加え、これによって生ずる癒着惹起状態を検討し、更に5%ヨードチンキによって生ずる癒着の発生機序を組織学的に検討し、併せて基質中の P, A, S 陽性物質の動態及び線維形成機序との関係等について検索した。

#### 第3編 腸管癒着防止に関する実験的研究

前編に引き続き各種薬剤による癒着防止効果を検討する目的で、主としてラッテによる動物実験を行った。用いた薬剤は近年報告されたもの、或いは古くから用いられ、現在尚その価値を失っていないもの、又は著者によって初めて試みられたもの等7種類に亘りこれらを用いた実験結果から著者の所謂癒着抑制係数を求めて、その効果を比較検討し、これにいささかの考察を加えて今後の研究の一助たらしめんとした。又 Varidase については家兎を用いて線溶現象発現に関する基礎実験を行い、

癒着防止剤としての価値について論じた。

### 論文審査の結果の要旨

大谷満提出の「腸管癒着症に関する研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は、次の通りである。

腹腔内手術に伴う術後腸管癒着症の問題は外科医にとって極めて重大であり、古くから多数の研究業績があるが、依然として未解決の問題を多く残している。著者は第1編において癒着発生条件、癒着発生機序ならびに癒着防止法について広範な文献的考察を試みた後、第2編において腸管癒着の発生機序を実験的に説明せんとし、種々の条件による損傷をラット盲腸部に加え、癒着発生機序を肉眼的、組織学的に検討した結果、漿膜の損傷により炎症性浮腫が生じ、析出された線維素により隣接腸管の間に膠着を生じ、この部に線維芽細胞の侵入が起り、基質中の糖蛋白の存在下に膠原線維の形成が促進され、漸次強固な癒着へ移行することを認め、癒着発生の基本形式を論じた。ついで第3編は癒着防止対策を検討したもので、同じくラットを用いて各種薬剤による防止効果を著者の案出せる所謂癒着抑制係数を求めて比較検討した結果、コンドイチン硫酸、Alphachemotrypsin, adrenochrome-monoamino guanidine-methanesulfate, Dexamethasone, ヒアルロニダーゼ等に多少抑制効果は認められるが、癒着の完全防止は望めない。ハリダーゼは癒着を抑制するが、副作用強く現段階では臨床に応用できない。従って手術における腸管の愛護的操作の原則は守られるべきであると結論した。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。